

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 30 日現在

機関番号：33936

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26670963

研究課題名(和文)リンパ浮腫のリスクリダクションを推進するための『看護ケア指針』の開発

研究課題名(英文)Development of nursing care guidelines for promoting lymphedema risk reduction

研究代表者

大西 ゆかり (Onishi, Yukari)

人間環境大学・松山看護学部・准教授

研究者番号：60633609

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、リンパ浮腫の予防指導に携わる看護師が、臨床現場で活用できるリンパ浮腫の『看護ケア指針』を開発することである。臨床でリンパ浮腫の予防指導を実践している看護師が困難に感じていることを聞き取り調査した結果及び文献検討に基づき、『看護ケア指針』(案)を考案した。リンパ浮腫ケアに精通する教育研究者や実践者を対象にインタビューを行い、『看護ケア指針』(案)について意見を得て、完成させた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop lymphedema nursing care guidelines that can be utilized by nurses involved in lymphedema prevention guidance in clinical practice. An interview survey of nurses who provide lymphedema prevention guidance in clinical settings was conducted regarding their perceived difficulties. Based on the results of this survey and a literature review, a draft of nursing care guidelines was created. We then interviewed academic experts and practitioners familiar with lymphedema care to gain feedback and complete the nursing care guidelines (draft).

研究分野：医歯薬学

キーワード：がん患者 リンパ浮腫 リスクリダクション 看護ケア指針 予防 患者教育

1. 研究開始当初の背景

リンパ浮腫は、乳がんや子宮がん、卵巣がんの治療後に起こり得る後遺症で、一度発症すると慢性の経過をたどるといった特徴がある。リンパ浮腫の発症は、がん患者の身体機能の低下だけでなく、心理社会面への影響や日常生活上の困難をもたらす (Tobin ら、1993)、がん患者の QOL の低下 (Ahmed ら、2008 ; Moffat ら、2003 ; 作田ら、2007) につながることで問題となる。リンパ浮腫は生命に直結しないことから、医療現場での優先度が低いことや、リンパ浮腫指導管理料が算定できる時期が術前・術後の限られた時期であることから、がん患者が主体的に実践できるような予防指導が十分にできているとは言い難い。また、看護の基礎教育にはリンパ浮腫の治療や看護がカリキュラムに組み込まれていないため、臨床現場の看護師はリンパ浮腫に関する知識と技術が不十分なまま、患者と向き合わざるを得ない状況にある。さらに、リンパ浮腫の予防指導に関する患者教育が実践できる看護師の養成はまだまだ発展途上であると考えられる。このような現状から、リンパ浮腫の予防指導を推進していく上で、看護師に対する教育的な支援が求められていると考えた。

研究者は、先行研究として、リンパ浮腫の予防的管理に焦点をあてた「がんサバイバーのためのリンパ浮腫セルフマネジメントプログラム」(以下、患者教育プログラムとする)を開発し、その有用性を検証した (大西ら、2016)。患者教育プログラムは、社会的認知理論を基盤とし、患者の主体性や自己管理能力を引き出し、高めることを重視して開発したものである。この患者教育プログラムを運用することによって、患者がリンパ浮腫のリスクを少なくするための主体的な取り組みをすることができれば、リンパ浮腫の発症を最小限にできることが示唆された。

しかし、開発した患者教育プログラムを臨床現場の看護師に提示しただけでは、効果的な患者教育にはつながらない。そこで、患者教育プログラムを活用した効果的な患者教育が実施できるように、看護師のリンパ浮腫のリスクリダクションや患者教育に関する専門的な知識と技術の不足を補うための『看護ケア指針』の開発が必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、がん患者のリンパ浮腫のリスクリダクションを推進するための『看護ケア指針』を開発することである。

以下に具体的目標を示す。

- (1) リスクリダクションという概念に着目して文献検討を行う。
- (2) リンパ浮腫の予防指導を行っている看護師を対象にインタビューを行い、がん患者のリンパ浮腫のリスクリダクションの援助における課題を明らかにする。
- (3) インタビューの結果と文献検討を基に、

がん患者のリンパ浮腫のリスクリダクションを推進する『看護ケア指針』(案)を作成する。

- (4) リンパ浮腫のリスクリダクションを推進する『看護ケア指針』(案)の適切性を検討するために、リンパ浮腫ケアに精通する教育研究者や実践者を対象にインタビューを行い、『看護ケア指針』(案)について意見を得る。

3. 研究の方法

(1) リスクリダクションの文献検討

データベースとして、国内誌は医学中央雑誌 Web 版 (1977 ~ 2015) を、国外誌は CINAHL (1981 ~ 2015) を使用した。キーワードは、リスクリダクション、リスク軽減行動、予防行動、risk reduction behavior を用いた。得られた文献から、患者のリスクリダクションや予防行動に関する記述のある文献を選定し、国内文献 6 件、国外文献 14 件を分析対象とした。

(2) 臨床でリンパ浮腫の予防指導を行っている看護師へのインタビュー

がん診療連携拠点病院でリンパ浮腫の予防を目指した患者教育に携わっている看護師を対象に、リンパ浮腫の予防を目指した患者教育における取り組み (教育内容や方法、工夫していること) と課題についてグループ・インタビューを実施した。調査期間は 2016 年 3 月 ~ 4 月であった。

(3) 『看護ケア指針』(案)の作成

文献検討、リンパ浮腫の予防指導に携わっている看護師へのグループ・インタビューの結果を参考に、『看護ケア指針』(案)を作成した。

(4) リンパ浮腫ケアの専門家へのインタビュー

『看護ケア指針』(案)について、リンパ浮腫ケアに精通する教育研究者や実践者を対象にインタビューを行った。調査期間は 2018 年 2 月 ~ 3 月であった。

(5) 倫理的配慮

(2) 臨床でリンパ浮腫の予防指導を行っている看護師へのグループ・インタビュー、(4) リンパ浮腫ケアの専門家へのインタビューについては、高知県立大学研究倫理委員会の審査を受け、承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) リスクリダクションの文献検討

国内では、患者のリスクリダクションについて記述した文献は無かったが、患者の予防行動についての記述はみられた。国内外においてリスクリダクションという概念は、飲酒・喫煙・薬物などによる健康被害、HIV などの性感染症、がん、心不全をはじめとする

慢性疾患などの発症や重症化の予防につながるものという意味で用いられていた。

リスクリダクションに先立ち、疾患や症状を引き起こすリスクファクターが存在しており、そのリスクファクターへの気づきがリスクリダクションを先導していた。リスクリダクションは、「症状の観察」「日常生活でリスクを軽減するための取り組み」「リスクとの折り合いをつける」の3つのカテゴリーから構成された。「症状の観察」とは、疾患の予防や早期発見のために疾患に特徴的な症状の観察を行うことである。「日常生活でリスクを軽減するための取り組み」とは、疾患の予防や早期発見のために日常生活で患者が意図的に行う行動のことである。「リスクとの折り合いをつける」とは、疾患のリスクがあるという現実を前向きに捉え長期的に適応しようとするということである。リスクリダクションの結果、症状の予防と早期発見、重症化の予防が期待される。

分析結果から、リンパ浮腫発症のリスクがある患者が主体的にリスクリダクションを行うことができれば、リンパ浮腫の発症や重症化の予防につながると結論づけた。

(2) 臨床でリンパ浮腫の予防指導を行っている看護師へのグループ・インタビュー結果について 対象者の概要

がん診療連携拠点病院3施設に所属し、リンパ浮腫の予防指導に携わっている看護師9名で、がん看護専門看護師・がん看護領域の認定看護師・リンパ浮腫の専門資格等を有する看護師を除外した。リンパ浮腫の予防を目指した患者教育の経験年数は、3~10年であった。リンパ浮腫の予防指導に関わる頻度は、毎週関わっている看護師もいれば、2~3ヶ月に1回の者もいた。

リンパ浮腫の予防指導における看護師の取り組み

3施設の看護師に共通する取り組みとして、パンフレットに記載されている項目に沿って、リンパ浮腫の予防に必要な知識と技術の提供を行っていた。そのパンフレットは、施設で独自に作成したものであり、リンパ浮腫指導管理料の加算に必要な内容が記載されたものを使用していた。施設により異なる看護師の取り組みとして、セルフリンパドレナージについては指導している施設と、エビデンスがないという理由から指導していない施設があった。パンフレット以外にビデオを教材として使用している施設があった。

患者教育を行う時期として、乳がん患者の場合は、術後4~5日目のドレーンが抜去された頃に実施していた。婦人科の患者の場合は、術後7~8日目の実施であった。

患者教育の実施は、日々の担当看護師であった。患者からの質問でわからないことがあれば、リンパ浮腫の専門資格を有する看護師と連携していた。

患者教育は、患者の病室で実施しており、その所要時間は、10~15分で実施している方から40~50分かけて実施している方まで様々であった。

リンパ浮腫の予防指導における課題

パンフレットに記載されていないことを患者に聞かれた時に返事に困っていた。具体的には、リンパ浮腫の発症率、いつ頃発症しやすいか、自分の場合はどうなのかと質問されたとき、リンパドレナージの圧の強さ、どのくらいの頻度で行ったらよいか質問されたときの対応に困難を感じていた。また、症状が現れていない段階から予防のための指導をしても、患者によっては受けとめ方が様々で伝わりにくいため、どのように患者への動機づけを行ったらよいか、患者のライフスタイルを十分に把握できないままに指導している現状などが明らかになった。

(3) 『看護ケア指針』(案)の作成

リンパ浮腫の予防には、がん患者が主体的に取り組むセルフマネジメントが重要であると考えた。『看護ケア指針』(案)を考案するにあたり、がん患者のもつ「力」に着眼し、先行研究で開発した患者教育プログラムを効果的に運用できることを目標にした。また、『看護ケア指針』(案)を実践活用するのは、病棟や外来でリンパ浮腫の予防指導を担っている看護師である。病棟や外来の看護師が、『看護ケア指針』(案)の活用に興味・関心をもてるように工夫した。

患者教育プログラムは、社会的認知理論を基盤としている。患者教育プログラムを効果的に運用するためには、看護師が理論的基盤を理解する必要があると考え、『看護ケア指針』(案)には、患者教育プログラムで基盤としている社会的認知理論の活用について解説した(図)。

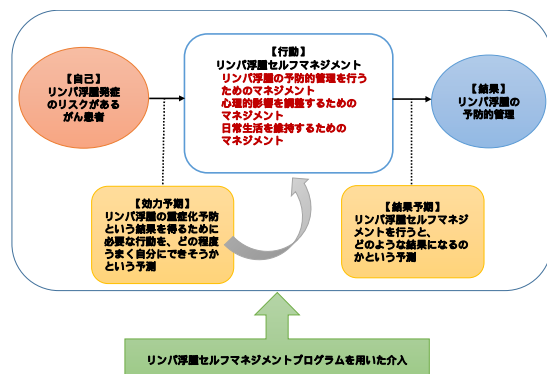


図 社会的認知理論を基盤としたリンパ浮腫セルフマネジメント

患者教育プログラムは、術前、退院前、初回外来受診日の3回のセッションで構成している。『看護ケア指針』(案)には、各セッションを展開する時に、看護師が患者のもつ力を引き出したり、高めたりするような教育的

な関わりができるように看護のポイントを具体的に記述した。例えば、患者への動機づけの場面ではどのような声かけをするのか、どのように教育内容を展開するのかなど実践例を随所に取り入れた。

各セッションの構成として、セッションごとに、教育目標と教育内容を詳細に記述した。セッションを展開する時に、導入 展開 まとめの順で、どのように展開すると患者の学びを深めることができるかを、看護師がイメージできるよう『看護ケア指針』(案)に記載した。

がん患者に対する教育的アプローチの仕方として、患者教育プログラムは社会的認知理論を基盤として、7つの教育技法を組み合わせることで活用することによって、効果的な患者教育が実施できるようにプログラム化した。『看護ケア指針』(案)には、7つの教育技法をどのように活用して教育的に患者に関わるかを具体的に記述した。患者教育プログラムを効果的に運用するために、各セッションのモデル例を提示した。モデル例には、教育目標と教育内容を提示し、その内容を教育する時の看護のポイント、患者用パンフレットの該当ページを示した。

(4) リンパ浮腫ケアの専門家へのインタビュー結果について 対象者の概要

リンパ浮腫ケアに精通する教育研究者や実践者5名から意見を得た。

- 『看護ケア指針』(案)に対する意見
- 『看護ケア指針』(案)で用いている用語について、リスクリダクションという用語は、看護師には馴染みのない言葉であるため、どの看護師にもわかるような表現に変更してはどうか。
- 『看護ケア指針』(案)が、何を狙っているものなのかがわかりにくい。
- 患者教育を実施する時に活用する教育技法という用語は、看護師にとって、とっつきにくい印象を与えるため、表現を修正してはどうか。
- 『看護ケア指針』(案)は文字が多い上に、ページ数も多いので、看護師が手に取ってみたいと思えるような工夫が必要である。
- 看護師が苦手とするリンパの解剖生理に関する知識の提供や、リンパ節郭清術を受けることによって、リンパの還流がどのように変化するのかなどを解説した資料が必要である。
- 介入のタイミングとして、なぜこの時期を推奨するのか、その理由を入れておくとよい。
- リンパ浮腫指導管理料の算定を視野に入れて『看護ケア指針』(案)を作成している点が良い。
- がん患者の心身の状態、学習へのレディネスをどのようにアセスメントしたら

よいのか、具体的に記述してほしい。

- リンパ浮腫の初期徴候の鑑別はスペシャリストも難しい。専門家とどのように連携していくか、その方策も入れてはどうか。

上記、専門家の意見を得て『看護ケア指針』(案)を洗練化した。

(5) 今後の課題

今後は、開発した『看護ケア指針』の有用性を検証していくことが必要である。また、研究成果を全国のがん診療連携拠点病院で活用して頂けるような働きかけを行い、リンパ浮腫のリスクリダクションを推進するための患者教育の普及を図っていくことが重要である。

そのためには、研究成果の活用例を公表するとともに、がん診療連携拠点病院をはじめとするリンパ浮腫の予防指導を実施している施設に対して、看護師に対する『看護ケア指針』を活用した患者教育に関する教育的支援を行える体制を構築していく必要があると考える。

<引用・参考文献>

- (1) Tobin MB, Lacey HJ, Mayer L, et al. (1993): The Psychological Morbidity of Breast Cancer-Related Arm Swelling. *Cancer*. 72, 3248-3252
- (2) Ahmed RL, Prizment A, Lazovich D, et al. (2008): Lymphedema and Quality of Life in Breast Cancer Survivors: The Iowa Women's Health Study. *J Clin Oncol*. 26(25), 5689-5696
- (3) Moffat CJ, Franks PJ, Doherty DC, et al. (2003): Lymphedema an underestimated health problem. *QJM*. 96(10), 731-738
- (4) 作田裕美, 宮腰由紀子, 片岡健他 (2007): 乳がん術後リンパ浮腫を発症した患者のQOL評価, 日本がん看護学会誌 21(1), 66-70
- (5) 大西ゆかり, 藤田佐和 (2016): がんサバイバーのためのリンパ浮腫セルフマネジメントプログラムの開発と短期的評価, 日本がん看護学会誌, 30(1), 82-92

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)
投稿準備中

[学会発表](計3件)

大西ゆかり, 青木美和, 藤田佐和: リスクリダクションに関する文献検討: リンパ浮腫発症のリスクがあるがんサバイバーの患者教育への活用, 第31回日本がん看護学会学術集会, 千葉市, 2016

年 2 月

大西ゆかり、庄司麻実、藤田佐和：リンパ浮腫のリスクリダクションを推進する患者教育における看護師の取り組みと課題、第 32 回日本がん看護学会学術集会、高知市、2017 年 2 月

大西ゆかり、庄司麻実、藤田佐和：リンパ浮腫のリスクリダクションを推進するための『看護ケア指針』の開発、第 33 回日本がん看護学会学術集会、千葉市、2018 年 2 月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大西 ゆかり (ONISHI YUKARI)
人間環境大学・松山看護学部・准教授
研究者番号：60633609

(2) 研究分担者

藤田 佐和 (FUJITA SAWA)
高知県立大学・看護学部・教授
研究者番号：80199322
庄司 麻美 (SYOUJI MAMI)
高知県立大学・看護学部・助教
研究者番号：00737637
青木 美和 (AOKI MIWA)
元高知県立大学・看護学部・助教
研究者番号：00737629

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

該当なし